

電子書籍と紙の本 —戦いと賢い選択—

医療センター 整形外科・関節外科センター 大川孝浩

2007年にAmazon.com社がKindleを発売して以降、大量のデータとして蓄積できる、コンパクトで便利な電子書籍は革命的に発展し、今や「紙の本」の売り上げよりも大きいという。また国内では1日に1件以上の書店が消えつつあるという現実を見ると、紙VS電子という媒体の相違のみならず、文字としての出版文化そのものの存続という次元にさえ至りつつあると思う。

酒井邦嘉著「[脳を創る読書](#)」¹においては、この電子書籍化が進む今、やはり従来の紙の本が良いのか、それとも電子書籍がよいのか、両者の媒体を読書した場合の脳の反応について、言語脳科学的に学究的な視点から論述している。ただ、実際には、読書する本の内容や、レイアウト、フォントなどの問題、電子書籍では使用する専用端末の相違によっても結果が異なってしまう、検証のための実験と新機種の開発自体が「いたちごっこ」にもなりかねず、したがってこの戦いをめぐる実証的研究については、論争自体に疑問が持てるとの意を唱えている。

孫引きした参考文献の論文を、図書館の奥から探して回ったことは昔懐かしい思い出でもあるが、この作業に関しては電子ジャーナル化が進むにつけ、良き時代になったものだと痛感しているが、この稿ではあくまで論文の電子化とは一線をおいて考えてみる。

確かに、過去から電子媒体より紙がいい！といった論説と検証は多く認められている。例えば、

- ・思考を助けるべき余白への書き込みができない（最近では電子ペンで可能？）
- ・どこに何が書いてあったかを記憶として脳により残すことができる
- ・プリントアウトしたものの方が間違い箇所に気づきやすい
- ・内容の進行に合わせて紙をめくる動作が、視覚までをもサポートする

などが論じられている。そうであれば、この両者の戦いとするのではなく、どうしたら紙の本と電子書籍を賢く選択できるかを考えて、自分が好む媒体を、その種類と内容によつての使い分けを、より他方の利点を脳科学的に意識しながら選択使用すれば、より一層の「読書媒体」としての整理と蓄積に役立つであろう。忘れてはならないのは、電子媒体のファイルは、デスクトップを飾ることはできても、部屋のインテリアとはなり得ない！と思うのは、老婆心半ばの私だけであろうか。

1. 医学図書館／2F閲覧室に蔵書あり 請求記号：019.12/Sa29no 資料ID：20272673